ソードロードと書いて剣の道と読め！！

卜全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソードロードと書いて剣の道と読め！！

【Ｎコード】
Ｎ９３１２Ｄ

【作者名】
卜全

【あらすじ】
喧嘩最強と恐れられた不良少年、長光英次。そんな彼の心を動かしたのは剣道……部に入部している期待の大型ルーキーだった。
そんな青春剣道ラブコメ。

第1話：第1話と書いて第1話を読め！！

「イチッ！ニッ！サンッ！シッ――――」

ブンッ、ブンッ、ブォンッ

道場の外に居ても聞こえる素振りの掛け声。

「ん…剣道部か？」

「何か気合い入ってんなぁ…」

その道場の前を二人の男が通る、制服の色から判断すると一年か。

「ん？知らねーの？うちの剣道部、今年大型新人が入ったんだと」

ピクッと俺の耳が反応する。

「あ～…なんか聞いた事あるなぁ、隣のクラスだっけ？」

「道場の子らしいな」

そんな会話をして興味無さげに歩き出したそいつらを。

「おい」

俺は肩を掴んで引き止めた。

「あぁ？いきなりなんだ…、あ、アンタは」

「もう少し詳しい話し、聞かせてくれねーか？」

「はぁ！？突然何言って――」

「ば、馬鹿！コイツ、あの長光（ながみつ）　英次（えいじ）たぜ」

「な、長光って…あの、喧嘩最強の…」

「そうだぜ…、そこらの不良が名前を聞いただけで怯える、鬼神の中学生…」

「な、なんでそんな奴がうちの高校に！？」

「知るかよ！」

「なぁ…早くしてくんねぇか、こちとら気が短ぇ方でなぁ」

「「は、はい！！」」

二人が起立して固まった、どうやら中学生ん時の事を知ってたらしい。

まぁ、構う事はないか、いつもの事だからな。

「そ、それで…話しと言うのは？」

「ここ、あるだろ」

俺は剣道部が練習している体育館をあごでさす。

「はぁ…剣道部ですか？」

「この部に入った大型ルーキーの名前、教えろ」

「えっ！何でー」

「ガタガタ言わず、さっさと教えろ！！」

「ひっ…」

とりあえず、脅しときゃ大丈夫だろ。

「え～っと…、あっ！そうだ！！雅（みやび）　楓（かえで）」

「雅　楓ぇ～？おい、本当にあってんだろうな？」

「覚えやすい名前だし、たぶん…」

自信無さげに言うが名前自体は確かに覚えやすいか。

「…わかった、もう行っていいぜ、悪かったな、時間とらせて」

二人を離し、しっしっと手を振るった。

「おい…剣道部、ヤバいんじゃねぇか？」

「長光に目ぇつけられるなんて…、何やらかしたんだ？」

「雅を探してたんだよな…、その雅が何かやったんじゃねぇか？」

「…先生に言った方が良くね？」

「…だな、え～っと、剣道部の顧問は」

「雅…楓」

俺は風通しの窓みたいな所から道場の中を見渡す。

「…居た、やっぱりここの剣道部に入ってやがったか」

ありゃ…忘れもしねぇ、入学式の日の夜。

俺に恐い者なんて無かった。

「おぅ、お前らか？最近ここいらで暴れまくってる中坊どもは」

「なんすか？あんたら」

そう…例えばその日、目の前に居るのはヤクザだ。

「お前らがちょっとイキすぎって報告があってな、こうして俺らがわざわざ治安維持に来てやったってわけだ」

なるほど、たぶん…今まで潰して来たグループの中でヤクザと繋がっていたのもあったって訳か。

「だが…だ、俺達は寛大だからな、１つ提案がある」

「へ～、提案？」

「あぁ、毎月、俺らに用心棒代を払う、そうすれば見逃してやる」

要するに…金を払えって言ってるもんか。

「さぁ…どうする？まぁ答えは決まってるだろ？」

「あぁ…決まっている、お前ら」

俺は仲間に呼び掛けた。

「…いくぜ！！」

【数分後】

バキィッ

「がっ…、て、てめぇら、こんな真似してどうなるかわかってんだろうな…」

「あっ？知らねーよ、なぁ、英次」

「あぁ、知らねー」

倒れるヤクザ共を見下ろし、俺達四人は話す。

「運動したら腹減ったなぁ」

「ミャクドか牛野屋でも寄ってく？」

「そーだなー、行くか」

そう…俺達四人は無敵だったんだ。

「…ん？」

その日までは――

「どうした？カク」

「誰か居るぞ？」

ふとカクの指差す先を見ると見知らぬ女が居た。

何か荷物を背負っている女がボーッとこっちを見ている。

「ありゃりゃ…あの制服」

「同じ高校の奴か？見られたとしたら厄介だなぁ…入学式のその日だし」

「仕方ねぇな…、ちと話しして来る」

「脅すんじゃねーぞ、カク」

「わかってるって」

カクがそう言いながら女に近付き。

ゴバァッ

――吹っ飛ばされた。

「…は？」

「あなた達は…悪ですね」

女が言う、その手には――

「…竹刀？」

「つーかカク！！大丈夫か！！」

カクを心配したよっしーが慌てて駆け寄る。

「心配なく…加減はしました」

「てめぇ――」

よっしーが女に向け、駆け出した瞬間。

ヒュッ

「めぇぇぇぇんっ！！」

ズカァッ

「！？」

速い。

女は一瞬でよっしーの脳天に竹刀を叩き付けていた。

「何者だよ…アイツは？なぁ、雨宮」

横にいる雨宮にそう問いかける。

「……」

雨宮はなんか目を見開いて、どこかイキイキとした表情でその様子を見ていた。

「…雨宮？」

「…ん？どうした？」

「…いや、何でもねー」

「…後二人ですね」

うわっ、そんな事やってる間にこっち来た。

「ち、ちょっと待て、そもそも俺らが何やった！？」

「…とぼけないで下さい」

女の視線は地面に転がっているすっかり忘れ去られたヤクザ達。

「…このオヤジ狩り、オヤジハンター」

なんんんんでそうなるなかぁぁぁぁあ！！

「…だから私はオヤジ狩り狩りです、因果応報、覚悟ッ！！」

「ちょっと待てよ…地面に転がってる奴らの人相見てみ？」

スゥッ

って、もう構えてるし！！

「…チッ」

女殴りたくねーしなぁ…、あの竹刀を取り上げるか。

確かに竹刀じゃリーチに差が出来るが…、逆にギリギリまで接近しちまえば満足に振るえねぇだろ。

そして竹刀を取り上げる。

「…さて」

俺と女はお互いに睨み合う。

コイツは当然…俺を接近させないように間合いをとって戦うはず。

が―

シュタッ――

「…へ？」

その逆、女は一瞬で俺との距離を縮めた。

「なっ…速―」

「めぇんッ！！」

ズカァッ！！

脳天に衝撃＆喋ってる最中だったんで舌を噛んだ！！

ドサッ

そのまま…情けなくも地面に倒れる。

頭に一撃を受けたので脳が回転しているのか周りの景色はぐにゃぐにゃだ。

――いや、１つだけ。

ぐにゃぐにゃな周りの景色と違い、その竹刀を持った女だけは鮮明にうつっていた。

てな訳で回想終了。

「あの女…、いや、雅　楓！！」

俺は風通し用の窓から楓を見る。

あの日から…俺はお前に言いたい事があるんだよ。

…惚れた！！

そう…これが、これこそが恋なのだ！！

【不良少年、長光　英次、高校一年、彼と剣道との出会いはここから始まった――――】

第二話：一方的な愛と書いてストーカーと読め！！

さて…問題はどうやって楓ちゃんに近付くかだ。

不良である俺がニコニコしながら近寄る訳にもいかねーし。

「素振り…止め！はい、じゃあ次、面打ち始め！！」

「ハイッ！！」

上級生だろうか、そんな掛け声とそれに続く新入生の声。

バシッ、ビシィッ

そして竹刀で面を打つ音が聞こえた。

「うるっせ～な、人が考えてる時にビシバシ…、！？」

その瞬間、俺の頭に一つの閃きが走る。

そう、このやり方があるじゃないか！！

「そうと決まりゃ…」

閃くや否や、俺は剣道場に向け、走る。

ガララッ…

そして勢いよくドアを開けた。

「やぁぁぁぁぁぁ！！」

「たぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

掛け声、練習の熱気に少し唖然とする。

しかしそこに居たのは見た所六人、しかも全員女だった。

（…男子はまだ来てねーのか）

「誰？桜場先生来たの？」

「いや…男子、ん～？なんか見た事あるような…」

「アンタと同じクラス？」

「いや～…違うと思います、確か同じクラスの男子が…」

ヒソヒソと面をつけたまま話す女子部員。

…ちょっと不気味だ。

「…長光君？」

と、一人入り口に居る俺の方に向け、走って来た。

垂れのゼッケンには『中原』の名字。

「…誰だ？」

「中原（なかはら）　岬（みさき）です、ほら…机、出席番号順で長光君のいっこ前の」

そうなのか？まぁなんにしろ知ってる奴が居るなら有難い。

「長光…長光、あーーーーー！！」

と、一人の女子部員が突然叫び出した。

「ち、ちょっと…うっさいじゃん」

「んな事より大変っスよ先輩！一大事です！！」

「はぁ？」

「思い出したんスよ、さっきクラスの男子が言ってたんスけど、アイツ、長光　英次！！」

女が俺を指差して話す、ふっ…俺も有名になったもんだ。

「アイツ、中学ん時、喧嘩無敗のヤンキーッスよ、その余りの強さについた名がーーー」

魔王。

そう…、中坊ん時、喧嘩無敗だった俺はそう呼ばれた。

「大魔王の手下！！」

…え？それってランクアップしてんの？ダウンしてんの？

「大魔王の手下…、そんな人がなぜうちの剣道部に？」

いや、大魔王の手下止めて。

「えっと～、何かご用ですか？長光さん」

ほったらかしだった中原がそう聞いてくる。

「あ～…中原、楓ち――じゃなくて、雅って奴は居るか？」

ふぅ…危ねぇ。

「楓ちゃんならあそこに」

中原の見る先、凛と正座をする女の子。

雅　楓が居る。

あぁあ～！可愛いぜコンチキショウ！！

「…ちょっと借りるぜ」

「えっ…あっ！」

俺は中原から竹刀を借（パク）り、楓ちゃんに向かう。

「……」

楓ちゃんは正座のままスッと俺の顔を見た。

上目遣い…うん、最高！！

「…よぉ、俺の事は覚えてるか？」

っと…周りの手前、一応は不良らしくいかねーとな。

「…はい」

お、覚えててくれるなんて…地味に嬉しいぜ！！

「…この前の不良C」

「…え　ぇ！？」

不良…C？

AでもBでもなく…C？

三番目に倒したからCですか？

「…長光　英次だ、雅　楓、お前に言いたい事がある」

「どうして私の名前をフルネームで知ってるんですか？」

「そんな事はどうでもいい！！」

ブンッ

俺は竹刀の先を楓ちゃんに向ける。

「俺は剣道部に入る！んで剣道で勝負だ！！」

「…え？」

そう、同じ部活…同じ時間を過ごす事により、二人は徐々に惹かれ合う。

これは宣戦布告に見せかけた…愛の告白！！

ふふふ…決った、確実に。

ガララッ…

誰だよ…せっかく人が決めてんのに、無粋に入って来た奴は。

「長光が剣道部を襲撃していると生徒から報告があったが…」

「いやいや…流石の長光でもそんな馬鹿な事やりませんでしょ」

入って来たのは生徒指導の先生二人。

「「ん？」」

目が合った。

俺の手には竹刀。

先っぽを楓ちゃんに向けている。

俺は不良として有名。

「…さて、長光」

「待て、待ってくれ！誤解だ、俺は何もやってねぇ！！」

「はいはい、い～から、話しは生徒指導室でゆっくり聞くからな」

ズルズルと連れて行かれる俺。

「ところで先輩、うちの高校に男子剣道部なんてありましたっけ？」

「…さぁ？無いんじゃない」

なんか不吉な会話が聞こえたけど気にしないぞー！！

ズルズル…

バタンッ↑戸の閉まる音。

「なんだ…アイツ？」

「あっ！桜場先生！！」

「なぁ、今の一年の長光じゃないか？何しに来たんだ？」

「なんか剣道部に入るって言ってたような…」

「ほー…剣道部にねぇ」

「すごいニヤリと笑ってますね…」

第三話：ロミオとジュリエットと書いて〇×忍法帳と読め！！

「さて…長光」

職員室に連れて来られた俺。

「剣道部を襲撃し、女子部員を連れ去ろうとした、違うか！！」

「違うわ！！」

「ま…まさか連れ去るだけじゃなく、その場で！？」

「だから違うっつの！！」

何を考えてやがる…この先公。

「…しかし、何でまた剣道部に入部なんだ」

チッ…めんどくせぇ質問しやがる。

「…別に、俺が何やろーが自由だろ」

「剣道部か…顧問は桜場先生だな」

剣道部の顧問…か、たぶん筋肉質なやーさんみたいだろうな。

い、いかん…、そんなヤローに楓ちゃんを任せらんねぇ。

「おっ…噂をすれば桜場先生じゃないか」

「何！？」

って…あれ？

「ふむ…君が長光君か？話しは東条…、あぁ、うちの部の部長なんだが、から聞いたよ」

女ぁ…？

タバコを吸いながら職員室に入って来る剣道部の顧問。

筋肉質とは程遠い、長身の女だった。

しかも二十歳くらいか…若い。

「アンタが…剣道部の顧問なのか？」

「桜場（さくらば）　遥（はるか）だ、教科は物理担当」

「ま…まぁ、別にいいけどよ、んで桜場さんよぉ」

バシッ

「あいたっ！」

突然頭をはたかれた。

「なっ…何しやがる！！」

「桜場先生、だろ？」

こんのババァ…。

バシッ！！

「何で叩くんだよ！！」

「なんとなくだ」

ッ…、しかし俺が避けれないとは何者だ？この女。

「さて…剣道部に入部したいそうだな」

「おぉ！！そうだった、これから三年間よろしく――」

「駄目だ」

「――頼むぜ、…あれ？はい？」

「君は剣道部に入れない」

「な、なんだよそりゃあ！！」

「まぁ落ち着きたまえ、そもそもだ…無いのだよ」

「無い…って、そりゃあまさか」

俺の脳裏に剣道場にいた女子部員の台詞（第二話参照）が浮かぶ。

「男子剣道部がな、つまり剣道部は女子しかない」

うっそぉぉぉぉぉぉん！！

「…な、ないの？」

「ない」

終わった…俺の青春。

部活

『えっと…竹刀の振り方はこんな感じ？』

『違います、ここをもっと…こう』

次第に仲良くなる二人

『次の試合…勝てるかな？』

『大丈夫…、英次君なら勝てます』

…一緒の登下校。

『練習してて気が付かなかったけど…もうこんな時間か』

『だいぶ…遅くなってしまいましたね』

『家まで…送ってくぜ』

そして…運命の日。

『俺…この試合に勝ったら君に言いたい事があるんだ』

『…英次君』

※長光未来図です。

「まぁ何も方法が無い訳でもない」

ピクッ

その台詞に俺は耳を動かした。

「なんだ？何かあるのか！？」

「部活が無いなら作ればいいだろう？」

「！？、そうだ！そうだった！！作るんだよ…俺が剣道部を！！！」

うぉお！！俺は今最高に燃えている！！！

「まぁ顧問がいないんで無理だがな」

…はい？

「…アンタが顧問やってくれないの？」

「私か？何故だ」

「女子の剣道部やってんならいいじゃねーかよ」
「おんや～？それが人にモノを頼む態度かね？」
「…ぐっ！」
こんの…。
「…おねがいします、さくらばせんせい」
ひらがながせめてのていこうだった。
「そうだな…なら一つ、勝負といくか？」
「…は？」
「うちの剣道部は三年は受験で来れなくてな、今は二年が二人、一年が四人の六人しか居ないんだ」
…少ないな、やっぱ剣道やる女子ってあんまいねーのか。
「うちの一年四人と勝負し、その結果を見て…決める」
「…っても、いいのかよ、女子対男子になるぜ？」
「構わんよ、良いハンデさ」
「…言うじゃねーか」
「それで試合はいつにする？」

「…早い方がいい」

「なら今週の日曜だ、それまでにメンバーを四人、集めろ」

四人…か、ど～すっかな。

まず…俺だろ。

カクとよっしーも無理矢理誘って…。

あと…雨宮か。

おぉ！！四人揃ったじゃん。

「…あれ？」

なんか…話しが上手く行き過ぎじゃね？

ま…いっか♪

「おっし！そうと決まりゃ早速行動開始ぃ！！」

俺は勢い良く教室から飛び出した。

悪いな剣道部女子一年、やるとなりゃ容赦はしねぇ。

ん？女子一年？

楓ちゃんは…一年だよな？

って事は…お互い敵同士！？

「なんつー事だぁぁあ！！」

俺の叫びに廊下を歩く奴らがビクッとなるが気にしない。

愛し合う二人は敵同士…それはロミオとジュリエット甲賀忍法帳。

「…どうする？」

しかし…勝たねば、俺の青春ライフが。

「しかし…よろしいのですか？桜場先生」

「何がです？」

「あんな問題児を部にいれて…ですよ」

「まだそれは決めてませんが…力が有り余ってるんですよ、アイツらは」

「ほぅ…力ですか？」

「えぇ、だからその力を部活にぶつければ…案外伸びるかもしれない」

「…ところで、うちの剣道部ですが」

「あぁ、もちろん男女混合ですよ、ただ今は男子が居ないだけで」

「…人が悪いですな」

第四話：ハンターと書いて狩人と読め！！

「そういう事で剣道部女子と試合する！！」

後日、俺はよっしー（本名、吉岡　篤）とカク（本名、角谷　広樹）を家に呼んだ。

ピコピコピコ…

「あ…やべっ！砥石持ってくんの忘れた、ちょっと採取しに行って来るわ」

「は？ちょっと待てや、コイツの相手俺一人じゃ無理だって！！」

「っても大剣で攻撃してもはじかれちゃ意味ねぇじゃん、すぐ戻るって」

「じゃあそれまで全力で逃げる！くっそ…攻撃激しいな」

「上手に焼けました～」

「肉焼いてんじゃねぇよ！！」

カク、よっしーに突っ込み。

「てめえら人ん話し聞けぇぇぇぇぇぇ！！」

バキャッ

俺、二人にどつき。

「「ぎゃぁぁぁぁあ！ＰＳＰが！！」」

二人が同時に叫ぶが気にしない。

「何すんだよ英次！もうちょっとで倒せたんだぞ！！」

「せっかくランク上がって良い素材手に入れれそうだったのに」

「黙れお前ら、人ん話しくらい聞け」

ったく…すっかりハマりやがって。

ここだけ見たらファンフィクション小説だろ思われちまう。

「ちゃんと聞いてたって、剣道部と試合して勝ったら剣道部入部だろ」

「なんだ、わかってんなら話しは早ぇ」

「悪いけど俺はパス」

「俺も」

二人がヒラヒラと手を上げた。

「はっ？なんでよ？」

「防具とか臭いじゃん」

「そんくらい我慢しろ！！」

わがままな奴らが。

「つ～か何で急に剣道なんだよ」

「高校んなったんだ、部活くらいやるべきだろ」

「だからって何で剣道よ？」

「あぁ、あれか？入学式ん日に竹刀持った女にブッ飛ばされた」

ギクッ

「まぁありゃ仕方ないって、あの女、雅はな、家が有名な道場だぜ、達人ってやつ」

「そういや剣道の達人はペンさえありゃ大体の奴には勝てるって漫画にあったぜ」

ペンって…そりゃあいくらなんでも無理だろ。

…ん？ちょっと待て。

「カク、お前やけに詳しいな」

「あぁ、クラス同じだったし」

「なっ！！」

なん…だと？

「どうした？英次」

「…なんでもねー」

うぅ…そういや楓ちゃんとはクラス違うんだよな。

「女にやられたのはくやしいだろーが高校から剣道始めて勝てる相手じゃねーよ」

「そうそう、それに部活やるならサッカーだろ、モテるぜ、サッカーは」

そう言いながらＰＳＰに手を伸ばす二人。

バキャッ

とりあえずＰＳＰを破壊した。

「あぁぁぁぁぁぁあ！俺のハンタァァァァ！！」

「お前ら…わかってねぇ、本当になんもわかってねぇ」

「あぁ！？」

「いいか…この学校の剣道部はな、今女子しか居ない」

「「！？」」

二人の目の色が変わる。

かかった。

「…詳細は？」

「俺は今日剣道部を覗いたがどいつもなかなか悪くない」

実際、楓ちゃんしか見てなかったけど。

「いいか？剣道部に入ればその女子達と一緒に部活を送れる青春ライフ！！」

「ぐっ…」

よし…もう一押しか。

「ま…待て、サッカーだってマネージャーに女子くらい」

「甘ぇなよっしー、マネージャーなんて多くて四、五人、基本部活は男だらけ」

チッチッチッと指を振る。

「だが…剣道部には（見た感じ）余計な男子も居ない！顧問も（生活悪いけど）若い女先公！！そして…経験者の女子が剣道を優しく指導（してくれるんじゃないか？）！！」

「うぉぉぉぉお！やってやるぜ！！」

「ビバ☆剣道部！！」

フッ…単純な奴等よ。

「それであと一人はどうすんだ？」

「…雨宮しか居ないだろうな」

「雨宮か、アイツ…この話し受けるのか？」

「雨宮には来て欲しいがな…戦力的にも」

雨宮…、雨宮（あまみや）　龍丸（たつまる）は剣道をやっていた。

訳あって中学の途中でやめたが…。

「…ちょっと聞いてみるか」

俺は携帯で雨宮に電話をかけた。

「―って事なんだが日曜の試合、出てくれるか？」

『……』

電話越しでの沈黙。

雨宮にしてみりゃ嫌な事思い出しちまうか。

「…嫌なら別にいい」

『いや…やるさ』

「…雨宮？」

『…試合は今週の日曜だったな』

「…あぁ」

『場所は？』

「がっこーの剣道場だ」

『…わかった』

ピッ

電話が切れる。

「…雨宮も来る、これで四人揃ったな」

無事、団体戦のメンバーが集まった。

「…へ？」

部活が終わり、先生の元に集合する私達。

「あの～先生、今なんて？」

「ふむ…つまり、だ、今週の日曜に練習試合をする事になった」

「いや、それはわかってんスけど」

「その相手が…」

「うちの高校の男子だ、魔王…長光　英次、ここにも来ただろう？」

長光君…やっぱり剣道部に入る気なんだ。

「まぁあれだ、前から言ってた近々やる他校との練習試合の前哨戦と考えて気楽にやりたまえ」

そう言い、タバコを吸う先生、あの…道場は禁煙ですよ？

あっ…ちなみに私、中原　岬です。

「なお、今回は一年のみの試合だ、東条と岸本は審判」

「えっ？うちら出なくていいんですか？」

岸本先輩の質問に桜場先生が頷く。

「さて…それじゃあ対戦順を決めるか」

桜場先生が試合の順番を決めます。

今回の場合、人数が四人ですから中堅は無く先鋒、次鋒、副将、大将の順番ですね。

あっ…一年四人って事は、私も出るんだ。

どうしよう…まだ始めたばかりなのに。

「では…まず、先鋒———」

「俺は大将をやる」

俺はカク、よっしー、雨宮の三人に堂々と言った。

本当は楓ちゃんとの勝負は避けたいが、それだと他の奴が楓ちゃんと戦っちまう。

「まぁ、いいけどな、順番なんて」

「相手も女子だしな」

「なら先鋒は俺にやらせてくれないか？」

案を出したのは雨宮だった。

「んじゃ決まり、先鋒は雨宮、大将は俺、カクとよっしーは？」

「んな事言われてもな…」

「なんでもいいならじゃんけんで決めろ、結局はどっちでも変わらないだろ」

「おいおい…いいのかよ」

「とりあえず…だ、雨宮と俺で二勝だろ？あとはお前ら二人のどっちかが勝って終わりだ」

「お前なぁ…」

ってな事で。

先鋒【雨宮　龍丸】

次鋒【よっしー（吉岡　篤）】

副将【カク（角谷　広樹）】

大将【長光　英次】

「この順番でいくぞ！！」

そして日曜日。

試合が…始まる。

第五話：自己紹介と書いて第一印象と読め！！（前書き）

更新、遅くて申し訳ありません…。

第五話：自己紹介と書いて第一印象と読め！！

日曜日…。

「おぉ…ここが剣道場か」

「この学校のは初めて入るな」

俺達四人は剣道場の前に来た。

「んで…誰に言えばいいんだ？」

「あっと…確か、顧問が桜場って先公だわ」

バシッ

「ぐはっ！？」

突然、後ろからどつかれた。

はたかれたとかじゃない、どつかれたのだ。

「桜場先生…だろ？」

「ぐっ、てめ…」

ズガッ

「やぁよく来たな、とりあえず中に入れ」

どつかれ、頭をさする俺を無視し、桜場は雨宮達を中に通す。

「お前の言う通りあの先生美人だな」

「性格最悪だがな…」

中に入る、部員であろう、六人の女子が正座していた。

「さて…そうだな、まずは軽く自己紹介からいくか」

桜場は俺達を見渡して話す。

「私は剣道部顧問の桜場　遥だ、ほれ、次」

「あ？私？部長の東条（とうじょう）　由真（ゆま）、よろしく～」

二年、部長がニコニコと笑いながら自己紹介をする。

「あたしは岸本（きしもと）　恵（めぐみ）、二年で副部長ね、趣味はアルバイト」

趣味は別に聞いてないんだがなぁ…。

「と、三年は受験で来れないから上級生は私らだけなんだよね、あとは一年から」

部長が楓ちゃん達をちょいちょいと呼ぶ。

「んじゃまずは岬ちゃん、自己紹介いってみよ～！！」

「えぇ！？私からですか？」

「ど～せやるんだし誰からやったって一緒だよ」

「うぅ…、えと…、中原　岬です、長光君とは同じクラスです、よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる中原。

「長光君、本当に剣道やる気なんですね」

「あ？俺が剣道やっちゃいけねーのか？」

「す、すいません！！」

「…なぜ謝る？」

俺はただ普通に聞いただけなんだがな…。

「え…？あっ！すいません！！」

「…まぁいいや」

「んじゃ、次は自分の番っスね、一年！旭川（あさひかわ）　日比（ひび）ッス！！」

ビシッと敬礼をする眼鏡をかけた女。

「いや～、入部を賭けての練習試合なんて漫画みたいで良いッスね～」

女…、旭川は楽しそうに話す。

「これでブログのネタにも…、ゲフン、ゲフン！」

「…あ？」

何？今のわざとらしいやつは？

「な、何でもないッス、じゃあ次！次行きましょう！！」

旭川はそう言って次に自己紹介する奴を呼ぶ。

…ん？あの女は？

「ハァイ！みなさん、おはよ～ございます」

外国人…、髪や瞳を見るにアメリカか？

ちなみに今は昼だがな。

「ミルフィー・フラッチです、よろしくお願いしま～す」

「へぇ…外国の人が剣道やんだな、なんか珍しいな」

「ミルフィーは【和】マニアなんスよ」

「イエス！ハラキリ、セップク、ウチクビ、日本の文化は最高ですね」

「いやいやいや、それ間違った知識だから！！」

日本誤解してんな、コイツ。

「今日は決戦デスね、安心せよ、ミネウチでござる～」

ブゥン、ブンッ！！

「どわっ、危なっ！！」

言いなりミルフィーは竹刀で高速素振りを始めやがった。

コイツ、ぜってぇ峰打ちをする気がねぇ

「さて…最後は今年入部したうちの剣道部最終兵器！！」

…！、来た。

ズィ…と部長と副部長が押す人物こそ。

「…雅　楓です、よろしく」

ペコリと頭を下げる楓ちゃん。

くはー…可愛いぜ！！

「…親父ハンターはもうやめましたか？」

が…顔を上げた瞬間、鋭い目で睨まれた。

やべ…まだ誤解されてる。

「カエデ、親父ハンターとは？」

外人、ミルフィーが興味津々な顔で楓ちゃんに聞く。

「それは私も聞きたいな…」

そして顧問の桜場も興味津々で…、げっ！誤解とはいえこのままじゃマジィ！！

「な、なんでも無いよな、さっ…俺らも自己紹介しよーぜ！！」

よっしーが機転をきかせて話を進めた、ナイス！！

よっしーとカク、雨宮が順に自己紹介をする。

…次は俺か。

「さぁ…時間も無い事だし早く試合を始めるか」

パンパンと手を叩く顧問。

「待てやコラッ！！」

「ん？どうした長光君」

「今かる～く俺の番飛ばしただろ」

「あぁ、君の事はよくわかっているからな、なんせ有名だ」

チッ…この顧問。

「いや…しかし、ちゃんと四人揃えて来たようだな」

「ったりめーだ、ホラ、対戦順」

俺は対戦の順番を書いた紙を渡そうとする。

「…ふむ、どうだ長光、ここは対戦順を発表せずに試合をしないか？」

顧問がニヤリと意味深な笑いをして聞いてくる。

「あ？なんでまた？」

「誰と誰が戦うかわからない方が面白いだろ？我々的にも、読者的にも」

まぁ…ど～せ楓ちゃんは大将だし、俺は楓ちゃんと戦えればいいし。

ところで…読者的にもってなんだ？

「まっ…なんだっていいや、んじゃそれで」

「ふむ…、では防具や竹刀はそこの更衣室にある、準備が出来たら始めるか」

顧問の案内で俺達四人は更衣室に案内された。

「とりあえずサイズの合う物を選んでおけ」

「あの…」
カクが小手を持ちながら手をあげた。
「ん？どうした、角谷」
「なんかめちゃくちゃ匂うんだけど」
「剣道の防具が匂うのは自然の摂理だ、気にするな」
「いや…でもこの面とかカビはえてるし」
「それは変えられない運命だ」
確かに…マシなやつが一つもない。
「こんなんつけたくねーよ」
カクとよっしーの訴えに顧問はハァッ…とため息をつき。
「お前達…何もわかってないな」
「あん？」
「それはなこの剣道部の先輩達がつけていた物だぞ」
「え！？」
「じゃ、じゃああの娘達の先輩が」

「あぁ、過去につけていたものだ」

「…って事は」

「その先輩の匂いが染み付いてる」

気持ち悪いな…お前ら。

二人は互いに顔を見渡し。

「俺、コレつける！！」

「コレは俺んだ！！」

防具の取り合いとなった。

「まっ…誰も女子とは言ってないがな」

ボソリと恐ろしい事を呟く顧問だった。

～着替え中～

「おっ…準備出来たか」

胴着と胴、垂れをつけ、竹刀を持って道場の中に入る。

小手と面は匂うのでまだつけないでおこう。

「うむ…なかなか似合っているじゃないか」

「ところで君ら、剣道の経験はあるの？」

部長が聞いてくる。

「大丈夫だって、前に木刀持った奴らに素手で勝ったし」

「…はい？」

口をあんぐりと開ける部長。

「ん？木刀のが竹刀より強いだろ？その木刀相手に素手だぜ、素手」

「いや…まぁスゴいけどさ」

部長は呆れた顔で。

「みんな～、たぶん勝てるよ」

試合参加メンバーにグッと親指を立てて報告した。

ナメられてるな…おい。

「一応言っておくが…ルールはわかってるよな？」

「まぁ…そこそこに」

「…試合時間は五分、延長に入った場合は三分、それまでに面、小手、胴のどれかで二本とれば勝ちだ」

顧問が基本的なルールを説明していく。

「なお、今回は突きの使用は禁止する、初心者がむやみやたらにやるもんじゃないからな」

まぁ…女相手に使うつもりもないけど。

「それじゃ始めるか…、そちらの先鋒は？」

「うっし、頼んだぜ、雨宮」

「あぁ」

すでに面と小手をつけている雨宮が竹刀（自分のやつらしい）を持ち、立ち上がる。

さ～て…相手は誰だ、中原か？眼鏡女か？外国人か？

とりあえず剣道やってた雨宮だ、まずは一勝…。

「よし…、ではこっちは楓、頼むぞ」

「…はい」

スクッと立ち上がる楓ちゃん。

…え？あれ？

第六話：昔の傷と書いてトラウマと読め！！

「ち、ちょっと待てや！！」

俺は慌てて顧問に声をかける。

「ん？どうした長光」

「雅は大将じゃねーのか！？一番強いんだろーが！！」

「確かにそうだ、だが一番強い者を大将にしなければならないというルールはない」

「…ぐっ」

言われてみりゃ…そうか。

「それに先鋒は大将についで重要な場所だ」

「あっ？」

「楓」

顧問が楓ちゃんを呼び寄せる。

「…はい」

「中原とミルフィーは今日が初めての試合だ、緊張をほぐす意味でも先鋒を任せる」

「…了解です」

さっ…と楓ちゃんは試合のリング（剣道の試合をやる正方形の場所）に向かう。

その相手は…。

「英次」

面をつけ、準備万端な雨宮が俺の所に来た。

「雨宮？」

「悪ぃな英次、お前、アイツとやりたかったんだろ？」

雨宮の面の先は楓ちゃんを見ている。

「ま…まぁ、順番だし、別に」

「俺な、アイツが先鋒に来る事、なんとなく予想出来てたんだよ」

…なぬ？

「でもな、あの日…入学式の夜にアイツの剣道を見たら」

雨宮はぐっと竹刀を力強く握る。

「なんか…思い出してな、昔、剣道やってた俺を」

「…雨宮」

雨宮　龍丸は剣道をやっていた。

「…いってくる」

「あぁ、勝ってこい！！」

仕方ねぇな、譲ってやるさ。

雨宮、そして楓ちゃんが互い礼をする。

「ほう…、彼、剣道の経験者だね」

「！？、わかるのか？」

「構えが違う、アレは剣道やっていた者の構えだよ」

さすがに剣道部の顧問やってるって事か。

「そうだ…、雨宮は昔、剣道やってた」

中学の時だ…。

雨宮は剣道を小学校からやり、そのまま剣道部に入った、そして退部。

別に剣道がつまらなかった訳でも弱かった訳でもない。

その逆、強かったのだ。

一年から雨宮は団体戦のメンバーに選ばれ、試合に出た。
期待されていたのだ。
―そして、それが気に入らないやつら（部活の先輩数人らしい）も居た。
ある日、大会中にソイツらの一人が財布が無くなったと騒ぎだした。
そして…財布は雨宮のバックに。
もちろん…雨宮はやってはいない、ハメられたのだ。
その事件で…雨宮は剣道部を退部した。
「…雨宮」
やっぱ、剣道やりたかったんだな、ずっと…。
「あっ、ちなみにその先輩共は後から皆でフルボッコだったが」
「…？なんの話しだ」
「いや…なんでも」
やべ…声出てた。
「しかし…雨宮が剣道をやっていたとはな」

楓ちゃんと雨宮を見て、顧問が部長と副部長に合図を送る。
雨宮が白、楓ちゃんが赤だ、一本をとった時にその旗が上がるのだ。
「では…これより一本目を始める、開始！！」
始まった…雨宮と楓ちゃん、互いに剣道経験者。
こりゃ試合が長引くか…。
なんせ竹刀持ったアイツにゃ俺も勝てな———。
スパーンッ
「一本！！」
「…あれ？」
早ッ！！
部長と副部長が高らかに赤い旗を上げている。
赤って事は…楓ちゃんの？
「まっ…今回に限っては相手が悪かったな」
顧問がニヤニヤと笑っていた。

「…あれ？」

俺（雨宮）…、今一本くらったの？

全ッ然見えなかったんだけど…。

「よし…次、二本め、始め！！」

えっ…ち、ちょっと待てっ———。

タンッ—

気が付いたら…目の前に雅が。

バシコーンッ！！

雨宮がとぼとぼと帰って来た。

「…お～い、雨宮」

雨宮の顔近くで手を振ってみる。

「……」

反応がない。

「…駄目だこりゃ」

「ショックだったんだろーな…」

ビクゥッ

「おっ…動いた」

「…ちょっと飲み物買いにコンビニ行ってくる」

「あぁ、行って来い」

そのままフラフラ～っと出ていく雨宮。

面、小手、胴、竹刀のフル装備をつけたまま…。

―あのままコンビニ行くのか？

「…ショックだったんだろーな、よっぽど」

「あんな長い回想とかついてたのに試合時間短かったしな…」
なんて不憫な奴…。

「雨宮…か、実力が見れないのは残念だったな」
顧問はメモ帳に何か書く。
「さて…、次鋒戦を始めるか、旭川」
「了解ッス、バ～ンとやっちゃうッスよ！！」
眼鏡をかけた女、旭川が正座から立ち上がる。
「うっし…、俺の出番だな」
「よっしー、相手の力は未知数だぞ」
「わかってるって、うわ…面臭ぇな」
よっしーと旭川が互いに試合場に出る。
「…よし、まず、礼から」
「……」
が、よっしーは動かない。

「?、どうしたんスか?」

「…礼ってどうすんのさ?」

あぁ、そういや…。

「何も知らないだな…、お前達は」

第七話：更新と書いて内容考えるのは結構大変と思って下さい。

「え～…では、これより次鋒戦を始める」

基本的な礼のやり方を教わり、試合は再開となる。

「では…、赤、旭川、白、吉岡」

顧問の声で旭川とよっしーが礼をし、構える。

「それでは…始め！！」

開始の合図、両者が共に動き出す。

「しっかし…あの旭川ってやつは強いのか？」

楓ちゃんの強さは…、まぁ身にしみている。

他の部員達はどうなのだろう。

「旭川か？中学の時に剣道部だ」

「ゲッ…経験者かよ」

「普通高校で部活に入る者はだいたいはその部の経験者だと思うがな」

呆れた顔の顧問。

「まぁ経験のある者が相手じゃ吉岡もキツいだろう」

「いや、そんな事もねーよ」

「まっ…負けはないわな、とりあえず」

俺とカクが顔を見合せ、ニヤリと笑う。

「？」

それを見て顧問は不思議そうに顔を傾げた。

「めーんッ！！」

バシッ

むむむ…また防がれた。

うーん…結構早く打ち込んでると思うんスけどねぇ。

私（旭川）はチラッと相手である吉岡君を見る。

なーんか…やりずらい相手ッスね。

「日比ちゃん、攻めにくそうだね」
「ヒビ～！早く敵将を討ち取るのです！！」
中原とミルフィーのズレた声援。
ふっ…甘いな。
「よっしーはな…いわゆる、引き分けの達人だ！！」
「引き分けの達人…ですか？」
「あらゆる勝負を引き分けに持ち込む男だ」
「なんだか…すごいようなすごくないような」
「まっ…、とりあえず負けはないと思うが」
俺は安心して試合の様子を見守る。
「少なくとも負けはない…か、だが、それでは勝つ事もない」
「…あ？」
顧問がスラスラとメモ帳に何か書いた。

「……」

う～ん…引き分けの達人ッスか、本当に漫画にありそうな設定。

こりゃブログのネタに出来そうッスね…、帰ったら更新しないと。

え～っと…更新内容は…。

「…？」

なんだぁ？急に相手（旭川）の動きが…。

よし…今なら、攻め込めるか？

…う～ん、しかしなぁ。

「おいおい…なんか二人共動かなくなったぞ」

「お互い、相手の出方をみようとしているのでは？」

中原が自身無さげに言う。

睨み合ってるって感じでもなさそうだけどなぁ。

「……」

《旭川》
サイトの更新…、どんな感じにしようッスかね。

「……」

《吉岡》
うーん…、しかしヘタに攻めて一本取られたらなぁ。

「楓ちゃんはどう思いますか？」

中原が楓ちゃんに聞く。

そうか、剣道の事なら楓ちゃんだな。

「…雑念がみえます」

「え？雑念」

「ふむ…、旭川は練習中も度々あぁしてぼーっとなるからなぁ」

メモ帳に書くボールペンを顎にやり、何かを考えるように顧問は言う。

「吉岡にしてもどうも攻めきれないようだ」

「おいおい…そんじゃ勝負つかねぇじゃん」

「安心しろ、試合時間は五分――」

ピーーッ

「時間です」

部長と副部長が赤、白両方の旗を上げる。

「とまぁこういう事だ」

「時間が過ぎるとどうなるんだ？」

「通常はもう三分、延長戦を行うんだがな…」

顧問は旭川と吉岡を交互に見渡し。

「ど～します？先生」

「このまま引き分けだな…、延長戦をやっても決着はつくまい」
「あ、はい、じゃあ引き分け！！」
旭川とよっしーが礼をして帰って来た。
「ごめん、みんな、勝てなかったッス～」
「ま、まぁこんな時もありますよ」
「気にすることないよ、ヒビ」
「…はい」
旭川を暖かく向かえる女子剣道部メンバー。
「いや～、みんな悪ぃ、決着つかなかったわ」
ドガッ
「ぐほっ！？」
「悪いですむかコラッ！！」
「何ぼーっと突っ立ってたんだよてめーは！！」
俺達男子メンバーもよっしーを暖かく向かえている。
「嘘つけッ！！」

心の声に突っ込みをするんじゃあない。
「さて…次は副将戦といこうか」
「おうよ、頼むぜ、カク」
「しゃあっ！任せな」
スクッと立ち上がるカク。
「ほぅ…角谷か」
「ところで、俺の相手は？」
試合場には角谷しか立っていない。
「安心しろ、もう準備万端だ」
ピ～ヒョロロ…。
「…ん？」
「なんだ？笛の音？」
「…入り口です」
楓ちゃんの声に皆が入り口を見る。
「ステップワン～、ヒトの生き血をすすりぃ」

な、なんだこの台詞？

「ステップツ～、不埒なアクギョ～ざんまい」

どっかで聞いた事あるよ～な。

シュビッ

入り口に居た人物が跳躍する。

俺から見てもかなりの跳躍力だ。

「ステップスリ～、みにくい浮き世のオニを！！」

ビシッ

その人物が竹刀をビュッと振り、かっこつける。

「ほうむってくれよ～、ミルフィー・フラッチ、ただいま見参！！」

垂れには白いチョークで直接書かれた『ミルフィー』の字。

「え～っと…あれが俺の相手？」

「…油断はするなよ、カク」

第八話：サムライチャンプと書いて最強の称号と読め！！

〜一回戦〜

―楓ちゃんＶＳ雨宮―

二本取って楓ちゃんの勝利。

試合時間…二本あわせても十秒もかかんないくらい。

〜二回戦〜

―よっしーＶＳ旭川―

引き分け。

そしてついに三回戦。

「では…これより角谷とミルフィーの試合を始める」

「その前にちょっと質問」

カクが顧問にビッと手を上げて質問。

「ん？どうした」

「あの垂れにチョークで直接書いたのはいいのか？」

そういや、ミルフィーの垂れにはゼッケンがない。

垂れに手書きで『ミルフィー』と書かれているのだ。

「ふむ、良い所に気が付いたな、あれには重要な問題がある」

「え？マジか！？」

「マジだ」

あの垂れに…いったいどんな問題が。

「その問題とは…」

「「「その問題とは…」」」

俺達三人は顧問の次の言葉を待つ。

ちなみに雨宮はまだ帰って来てない。

「…ゼッケンにミルフィーの文字が収まらんのだ」

ずっこけた。

「何かと思ったら…んな事かよ」

「いやいや、これがなかなか大変なのだよ、一文字二文字の名字なら軽く収まるが、ミルフィーの場合はーも入れてきっちりゼッケン内に収まらん」

一応言うがな、文章だから《ーも入れて》とか言えるんだぞ。

「大会を見ればわかるがな、例えば大前田みたいな三文字の名字の奴のゼッケンでさえもう余裕がない」

「なるほど…じゃあこのままずっと手書きって事かよ？」

「いや…ミルフィーのゼッケンは今店で注文したばかりだ」

「とても楽しみデス！！」

ニッコリと笑うミルフィー。

「さて…質問はもういいか？それでは角谷とミルフィーの試合を始め―」

「スト～ップ！！」

次に手を上げたのはミルフィーだった。

「どうした？ミルフィー」

「ハルカハルカ！アイツ倒したらレベルアップ？」

ミルフィーが竹刀でカクをさす。

「アイツって…」

あ、軽く落ち込んだ。

「いや…今の角谷を百人倒したとしても百の経験値も出るまい」

「スライム以下かよ…」

あっ…すげー落ち込んでる。

「だが、それはこっちも同じだぞ、ミルフィー」

「そっか～、やっぱりサムライチャンプへの道は遠いネ」

へ？何チャンピョンだって？

「はやくシンケンでバっサバっサしたいデス…」

…シンケン？

……しんけん？

……真剣！？

バッサバッサって…刀じゃん！！？

「お～い…大丈夫なのか？女、サムライチャンプとか言ってるが」

「サムライチャンプになったら刀を自在に扱ってもいい」

「え？マジ！！」

「嘘に決まってるだろ」

「てめっ！教師のクセに人騙してんじゃねーよ！！」

「「つーか騙されんなよ」」

よっしーとカクに同時に突っ込まれた。

「んで…サムライチャンプって？」

「さぁ？サムライ界最強の称号じゃないか？」

超なげやりな答えだった。

「ちなみにここ少し前、隣町の一条大橋であちこちの剣道部員が襲われる事件が多発していただろ？」

「あぁ…そういやあったな、最近聞かないけど犯人はなんか若い女だって…」

ん？若い女？

俺はチラッとミルフィーを見た。

「…？」

ミルフィーは見つめ返して来た。

「そんな弁慶みたいな真似したのが…アイツか？」

「ふむ、これ以上騒ぎが酷くなる前に私がここにスカウトした」

「…なんて？」

「剣道強くなったら刀が貰えて自由に使えると」

「ま…マジか！？」

「嘘だ」

コイツ…また。

「そんな嘘すぐバレるに決まってんだろーが」

「…ミルフィーは竹刀千本集めればサムライチャンプになれると思っていたのだぞ」

うん、案外大丈夫かもしれない。

「あ、そーだ、カエデ」

「…はい？」

俺と顧問が話ししてる間にミルフィーは楓ちゃんに声をかけていた。

「カエデの家にはカタナがありますか？」

「刀…ですか？」

「イエス！！」

あ…まずい。

「なぁ…なんかバレそうじゃないか？」
「…楓はアドリブが出来んからなぁ」

「…刀ならありますよ」
家にあるんですかい！？
「オォ！すばらしーですね！！」
ニッコリと笑うミルフィー。
「私はかならず勝ってサムライチャンプになります！！」
そしてカクを見る。
「しょーぶです！！」
「おい…大丈夫なのか？前に剣道部員襲ってた奴だし…強いだろ？」
カクが心配なのか顧問に聞いてる。
「安心しろ、こと剣道に関しては全然素人だ」
「そっか、よし…」
カクが試合場に向かう。

「まっ…だから危ないんだがな」

この顧問は悪魔だった。

第九話：漢と書いておとこと読め！！

試合開始早々―

俺達は顧問の言葉の意味を知る事になる。

「始め！！」

審判をやっている部長と副部長の合図で試合が始まる。

「そぉぉぉぉぉおいッ！！」

先に動いたのはミルフィーだった。

そうなんです、→の掛け声はミルフィーのなんです。

ミルフィーは竹刀でカクに攻撃を仕掛けた。

―ジャンプ斬り。

「って、えぇえ！？」

慌てて避けるカク。

ミルフィーの竹刀は空を斬り、床へ。

「まだです！！」

が、ミルフィーは竹刀の握りを変えた。

「秘剣！ツバメ返し～」
そしてカクめがけて振るう。
「ち、ちょっと…」
バシンッ
カクは竹刀でなんとか応戦した。
「オォ！すばらし～です」
休まず、斬りかかるミルフィー。
「ちょっと待てぇぇぇえ！！」
カクの悲鳴が道場に響いた。

「すごい戦いだね…」
仲原がゴクッと息をのみ、話す。
「…あぁ」
俺もミルフィーの振るう剣技に目が釘付けだ。

「…でも剣道じゃないね」
「さっきからメンやコテやドウみたいな掛け声が一つもないな」
俺達二人は同時に顧問を見た。
「…ξ」
顧問はあっちゃ～みたいな顔で頭をかいている。
「東条」
「はい？」
そして部長にクィッと合図を送る。
「送りバンドですかー？」
「違う」

顧問が部長と話す中、俺は楓ちゃんを見た。
楓ちゃんはじーっと二人の試合（死合）を見ている。
「…雅？」
呼んでみるが反応はない。

バシィッ

「おぉぉぉぉぉぉ！！」

そんな事をやってる間にまたミルフィーがとんでも技をやったようだ。

「！？」

それを見て楓ちゃんが眼を見開く。

そうか、考えてみれば楓ちゃんは道場の娘。

あんなとんでもな試合をして怒っているんじゃないか？

「…今のは」

楓ちゃんが口を開く

『今のはさすがにやりすぎです』

そう言うのだろう。

「今のは鬼瓦犯課帳、第２３話の殺陣（たて）シーン…」

…あれ？

「…ミルフィーさん、素晴らしい再現度です」

「雅？」

「楓ちゃん、時代劇好きだから…」

ふむふむ…楓ちゃんは時代劇好きと。

「ち、ちょっと、早いとこ、止めてくれ！！」

ミルフィーの猛攻をなんとかさばきながらカクが声をあげる。

よくさばいてこれたな…、さすがディフェンスに定評があるカクだ。

「わかったわかった、東条、試合中止だ」

「わかりました、岸本」

「了解」

部長と副部長が旗を持った両手をあげる。

「ふぅ…助かった」

カクがそう思った瞬間。

「ムムッ！すき焼きいいいい！！」

ミルフィーが構わず駆け出す、どうやらまだルールを把握してないようだ。

ちなみにそれを言うなら隙あり…だ。

ダンッ

そんなこんなでミルフィーはカクに向けてジャンプ。

「げっ！？」

突然の事でカクは反応が出来ない。

「ストーップッ！！」

と、顧問の掛け声。

スタッ…

それを聞いたミルフィーは何もせずに着地した。

「ハイ？ど～しました、サクラバ」

「ミルフィー」

くぃくぃとミルフィーを呼ぶ顧問。

「？」

ミルフィーは頭に？マークを浮かべ、顧問についていく。

「部長、ちょっと頼む」

そう言ってミルフィーを引っ張る形で更衣室に入っていく。

ゴチンッ☆

「アウチッ！！」

「……」

ちょっと沈黙したあと。

「んじゃこの試合は角谷君の勝ちって事で」

「ちょっと待て！何事も無かったかのように再開すんのか！？」

「まぁまぁ…さぁて、これで勝負は一勝一敗一分、これはわからなくなってきたねぇ」

「大将戦で勝負が決まる…って事？」

試合を終えたカクが面を取って話す。

「そゆこと」

「そうか…なら残念だったな」

俺は竹刀を掴む。

「大将は俺だ！！」

「おっ！来たね…、噂の『魔王』」

「違うよ由真、『魔王の息子』だよ」

…魔王子？

「…まぁいいや、とにかく、こっちの大将は俺だ、そっちは――？」

と、そこまで言って一つの事に気付いた。

※1・一年は全員で四人。

※2・楓ちゃん、旭川、ミルフィーが試合に出た。

※3・試合に出るのはあと一人。

…あれ？あと残ってるのは。

「な、永光君、えっと…その、お手柔らかに…ね？」

「な…仲原か」

う～む…ちょっと可哀想な気がする。

まず俺と仲原では身長差もかなりある。

仲原が剣道の経験者だ、という事なら話しは別だがどうやら仲原も

剣道は高校に入ってかららしい。
なんかこのままじゃ悪役みたいだな…。
だがしかし！俺の青春時代の為には勝つしかないのだ！！
「…永光君となんて、絶対勝てないよ」
「仲原、悪いがこれも運命だと思って諦めな」
「運命…」
…なぜ顔を赤くする？
「さて…、そんじゃいくぜ！！」
「もしかして…面つけないの？」
部長が興味津々な顔をする。
「…あれ？」
あぁ、そういや。
危ない危ない…、さすがに面はつけないと――
「おぉ…装備無しで行くなんて、漢と書いておとこッスね」
――あれ？

「さすが『魔王』、女の竹刀なんでくらってもへじゃないってね」

こらこら…。

「え？防具つけないんですか…？危ないですよ」

「ちょっと待て！今つけるから」

俺は面の装着を始める。

あれ？結び方はこれでよかったんだっけ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9312d/

ソードロードと書いて剣の道と読め！！

2010年10月28日03時24分発行